

くりすます近づく

冬至当日。巷では三連休の初日だが、センターは開館日。天気は今ひとつパツとしないのは、この姉さんの仕業だろうか。午後三時、階下からザワザワと声が聞こえてくる。

「ちわっす！ 皆、元気い？」

「いらっしやい。雨女さん、と八宝さん。あ、小梅さん・・・」

「へへ、今日から冬休み。塾お休みだし、遊びに、いや勉強しに。そしたら、偶然お二人と」

「勉強？ 冬休みの宿題とか？」

「それは明日から。今日はマップ関係の情報を、と思って」

「それはそれは。じゃ、情報担当の隅田くん、お願い」

「はい、先輩。ではお嬢様、こちらへ」

千歳は小梅を円卓に案内すると、いきなりweb講習スタイルに持ち込む。グリーンマップ関係の情報は紙媒体もなくはないが、全国や各国での実例をすぐに呼び出すにはやはりインターネットに限る。しかし、どうも様子がおかしい。

「ところで小梅さま、僕のどこがいいって、櫻さんから聞いた話、まだ覚えてる？」

「エ？ まだ聞いてなかったんですかあ？ 本当にスローだ」

「一つは聞いたけど、あとはお得意の笑顔で誤魔化されちゃって」

「そのスローなところと、一緒に居ると和むところ・・・あ、言っちゃった」

検索サイトをパタパタやっていた千歳の早手が止まる。小梅は舌を出しつつ、カウンターを見遣る。当の櫻さんはにこやかながらも、クリスマスの飾り付けがどうのこうのと舞恵と議論しているところ。

「そっかあ、そしたら和ませて差し上げないと・・・」

「大丈夫ですよ。そのまま。櫻さん、千歳さんと居る時、いつも楽しそつだもん」

「クーツ、グツと来るねえ」

今日のこの「クーツ」は過去二回のは違つ。兎にも角にも、小梅にはやられ放しの千歳であることには変わりない。

「あ、スローマップだって。いつの間につったんですか？」

「はあ、函館かあ。僕にピッタリ？」

PCに向かつてるのにスローな千歳というのも珍しい。

ハコダテが出てきたところで、ハコモノ論好きなハコ入り娘さんとハクンはと言うと、

「で、法人名はどんな感じになりそうaska?」

「何となく絞ってはみてるんだけどね・・・」

文花は得意のメーカーでボードに候補名を書き並べていく。いきいき地域、エコミニニケーション、環境ソリューション、地域元気、さらには、Area Social Responsibilityなどのまで出てきた。

「これと組み合わせる下の名称は、協会、ネットワーク、プラットフォーム、あとプランニングとか」

「プランニング・・・ 計画にしちゃってもいいんじゃないaska。例えば、地域元気計画、略称は『地元』」

「NPO法人 地元? ちょっとなあ。ちなみにセンスは『NPO法人 五カん』なんてどうだ、とか仰ってたけど、それもねえ」

「自分だったら、やっぱり『現場』とか『場力』とか入れちゃうかも、です」

「『場』と来たか。ルフロんにbakunで云われてるだけのことはあるわ」

「bakunは八なんすけどね、そう言われてみると確かに相通じるものが」

こんな状況なので、年内の決定は難しそうだ。どっちにしても名称募集は仕事納めの日までに。正式決定は次回の理事会で、となる。

「で、監事の件なんですけどね」

舞恵は早速、候補者リストを持って来ていた。都合三名。

「どの方もいつでもOKって感じなの?」

「別に非常勤とかで入ってもらう訳じゃないですよ。監査とか会合とかに出てくる分にはどなたも平気でしょ?」

「すると、後は地元通とか、市民活動に理解があるとか、かあ」

「会ってお話されますよね。年明けたら都合に応じて連れてくるようにします?」

銀行としても社会貢献に力を入れつつある分、話が通りやすくなっているようだ。舞恵の「存でそこまで可能というのが俄かには信じ難い事務局長。だが、それにはちょっとした裏話があったりする。一つお楽しみである。

帰り際、ルフロンは再び櫻に絡んでいる。

「だから、エコなtimesてのをニコで提案すりゃいいんよ」

「図書館てゆーか、当建物を代表して一階のロビーにツリーがちゃんとあったでしょ。セ

ンターはいいのよ。LEDだってチカチカやればそれだけ電気も食うんだし」

「ブログに出てたじゃん。その何とか装置で油取って、発電すりゃあさ」

やっぱりお飾りが好きなルフロンは、このシーズンを措いて他にいつ当所をデコるのか、という論調。対する櫻は、エコを発信する施設だからこそあえてシンプルに、という路線を譲らない。エコとデコ、果たして調和し得るのか。

「まあまあ、二人とも。お客さんが笑ってるわよ」

円卓脇では八兄と千兄が明後日の予定だか何だかを話し合っているが、それはスルー。カウスターでの応酬に聞き耳を立てていた小梅は、検索を中断してクスクスやっている。

「しょうがないなあ。これならいいでしょ」

ボードを反転させると、カラーマーカーでいつて器用に一本の小振りな木を描き出す。都合よく赤・青・橙・緑・黒と各色揃っているの、デコも容易。大きめの赤リボンが利いている。ツリーを中心にクリスマス装飾風のイラストが散りばめられると、忽ちそれらしいムードになるから不思議だ。立体ではないが、これは快作。

「あとはアルファベットを並べれば完成です。じゃ、さっきメモってたお姉さん達、どーぞ櫻が田中と書いたまでは良かったが、舞恵は何を思ったか、

「くりすます、と」

「ちょっと、アルファベットって、イラストレーターさんご指定だったのに」

「この方がカワイイじゃん」

「それじゃ何か、クリがおすましましてみたい」

仲直りになったんだか、そうでないんだかよくわからないが、即席イラストのおかげで場が和んだことには違いない。小梅は「くり」のところに、すまし顔の栗を付け足して、さらなる笑いを誘う。

一年で最も短い日が沈みつつあったが、雨雲に隠れてはわからない。ただ、日没時刻になったことは認識できたので、三時からの来客の動きがあわただしくなる。

「んじゃ、初姉んところ行って来るし」

「あ、よろしくお伝えくださいませ。小梅さんは、どちらへ？」

「一緒に行きます。英会話、面白そうだし」

「そっか。でもその先生が『くりすます』なんて書いてんだから、思いやられるワ」

「フン。ほんとはHappy Holidayでいいんよ。櫻姉が先に田中なんて書いてちゃっから」

「Holiday... そりゃ当館は明日から休みだけど。クリスマス当日はホリデーじゃないもん。

おあいにく様」

「あ、いいや。続きはまた明日ネ」

「はいはい。クルクルくりくりルフロンさん」

漫談になりそうでならないのがこの二人の掛け合いの特徴。仲が良いことの裏返しであることは皆わかっているんで、誰も止めたりはしない。それにしても、クルクルくりくりとはまた言ってくれたものである。これでリズム合わせ中に、ビックリはまだしもギックリとかがあつたら笑えないが。

* * * * *

日頃の行いが善いせいか、午後になったら晴れてきた。だが、せっかくの好天もスタジオ入りしてる間は関係なし。十四時から十七時までの三時間で、四曲は最低通してみよう、というから欲張りなようなそつでないような。取り急ぎ、まずは楽曲データを流してみる。ここでの仕切りは勿論、M. @ Hey!!

「一、二曲目は千ちゃん作曲、三、四曲目は不肖業平の作です。全面的に編曲などもしてますが、業平作については弥生嬢のアレンジが一部入っております」

「へへ、恥ずかしながら。すでにお聴きいただいとると思いますが」「まずは音がちゃんと出ないことには・・・」

いつもなら、ここらでツッコミが入るところだが、今日は控えめな弥生嬢である。

タイトルが決まっているのは一曲目の『届けたい・・・』のみ。二曲目は八広の詞が付いたところまでは行ったが無題。業平作曲分は、一応流域環境なんかをモチーフにはしているが、詞も題もまだ。てな訳でとにかく音合わせが優先ということになり、今日の日を迎えた十人である。楽器を持って来ているのは千歳(G^{pl})、弥生(B^{ssb})、舞恵(一部軽量のポロ^{パト}ック)程度。小道具関係で言えば、八広のスティック、業平のハイスペックノートPCといったところ。冬木はビック、南実はリードを隠し持っていたりするが、どうやら必要に応じて、というところらしい。鍵盤楽器はスタジオ常設なので、櫻はその手の持ち物はなし。蒼葉と文花はオーディエンス役ということになる。

櫻はすぐにも合わせられるのだが、やはりおとなしく口ずさむ程度。リズムセクションの二人も空打ちこそしているが、肩を揺らすにとどめている。作曲者の千歳は、アンプからの音像が鑑賞に堪え得るかどうかをチェックしている様子。

「八十年代アイドル歌謡曲に通じるものを感じるわぁ。いいかも」

最初は音響にビビっていた文花だったが、自身のカラオケレパートリーと通じるものを感じたようで、好感触。これに実際の歌が乗ると、どうなるか。聴衆の反応がすぐに得られる

のはライブセッションのいいところである。

「じゃ一曲ずつ演ってくるとしますかね。各員、配置にどうぞ。ベースは抜いちゃいます。リズム隊は、クリック音だけでいい？ 櫻さんは、と・・・」

「鍵盤の練習、先にします。OFFでお願いします」

「了解。で、千ちゃんは？」

「鍵盤とぶつかつちやうかも知らないから、今は聴き役に回ります」

男性二名と女性三名、この組合せが楽器側と聴衆側それぞれにできる。按分としては良好である。各奏者からスタンバイOKの合図が出る。八広はヘッドホンを付け、カウントを打つ。業平が難なく同期させて一曲目スタート。弥生のベースが少々危なっかしかったが、影の練習の成果あつて、無難に間奏のとこまでで行った。

「この曲、ソロって何が入るんだっけ、千歳さん」

「ギターソロは想定してないから、櫻さんがシンセで。または、サククス？」

南実は自分に向けて指差すと、「え？ そうなんだ」

弥生が気を利かせて、「あ、デモ用があるから。今、持って来ます。でも、リード・・・」

「実は持って来たんだ。本体だけ貸してもらえれば」

「やったあ、サククス。いいぞ、こまつつあん！」

何故かルフロンが大喜び。デモで仮想管楽器ソロは聴いていたが、楽曲が陽気な割にはインパクト不足と感じていた。やはり生に限る、ということらしい。

リードは多少使い込んであるものの、別の管に馴染ませるのには時間もかかる。吹き込んで暖める必要もあるのでそれは尚更。南実がウォーミングアップしている間、歌姫は徐々に鍵盤とヴォーカルの同時進行を始めていた。ソロが入らない状態で間奏も流し、「届けたい・・・」一つの形を見るに至る。

サククス奏者を交えての通しに入ったのは、スタジオ入りしてから四十分後のこと。仮に一曲五十分で音合わせができたとしても、やはり三時間ではキツイということになる。まして聴き慣れた一曲目でこれだけ時間がかかるとなると・・・

だが、ここぞで何かをやってくれる南実嬢は、しばらく吹いていないとか言ってた割には、仮ソロの進行に近い形であっさり吹きこなして魅せる。孤高さが売りでもある人物ゆえ正にソロ向き。ソロはソリチュードに通じ、時に翳を伴つものではあるが、ここでは逆。脚光を浴びるため、と言っている。その力強い演奏は、強肩・豪腕に加え、彼女の肺活量が並みでないことをも証明した。

という訳で、割とすんなり一曲目は音合わせができた次第。十五時になる手前である。こ

の後は一曲四十分ペースで行けば、予定通りこなせることになる。果たして？

二曲目は櫻が当初手こずっていたダンサブルナンバー。コード進行をピアノ主体に変える version にアレンジし直したため、今の櫻にはどうということはない。より重く響くピアノ音を選んで、ベースに重ねる。

出だし順調、かに見えるも、業平が調子に乗ってイントロを長めにしたもんだから、リハールはイントロ部分で一旦ブレイクとなる。弥生は手を休め、まずは内蔵音源のベースを流すことに。かくして楽器側には、業平、櫻、八広、舞恵、そして千歳が回る。

元々はカッティング調のギターを鳴らしながら歌う想定で作った曲だったが、そのギターリスト氏は自前のギターを冬木に預けて、リードボーカルに専念することにした。もう一度イントロから。千歳は深呼吸してから最初の歌詞をマイクに乗せる。初めて彼の歌声を聴く文花の顔と言ったら、そりゃもつ、である。千歳は一寸笑みを浮かべるも、そのまま歌世界へ。ドラムを叩いている詩人さんが書いた詞だが、流域を訪ね回っている際に得た情感を散りばめているとかで、歌ってみると実にしっくり来る。歌詞カードを見ながらではあるが、とにかく歌唱に集中できているので、時に情景を思い描くこともできる。

歌を介して詞が視覚化されたならしめたもの。蒼葉嬢はずっと目を閉じて聴き入っている。が、心の中で画が浮かんでいるのかどうなのか。一つ画家さんにも感想を聴いてみたいものである。

テンポが速い分、サククスで即興、というのはさすがに難しい。となると、今度はこの人の出番である。

「一応、ピックは持って来たんで、ちょっとやってみましょっか」

「普段はコード進行専用で使ってるんで、弦がビクリしちゃうかも知れませぬね」

アンプに通さない状態で何となくシャカシャカ弾いていた冬木だったが、間奏のところでギターソコを入れようじゃないか、という提案を出してきた。千歳では何かとお騒がせな彼のこと、一部のメンバーはどうせフライングとか我が道系とか、とあまり期待してなかったのだが……。

曲者というのはやはり一味違うものである。エフェクタを使っていないせいもあるが、抑えが利いていてなかなかの好演ではないか。ルフロンはコンガを叩くのを止めている。決してこんがらがっている訳ではない。

弥生が入ったり、八広が抜けたり、何回か通して演ってみた。画家さんは云う。「何か川の流れが見えた気がした……」この蒼葉の一言により、曲名が決まる。名作(?)『Down Stream』の誕生である。

三曲目はミディウムスローながら重厚な一曲、四曲目は弥生アレンジにより多少メロディアスになったが、やはりドラムとベースが要になるダンスチューン。詞がまたなので、歌い手も決まっていないが、今日のところは、ギターとベースがどこまで対応できるかが見所。千歳と弥生はへろへろになっているが、リズム隊はてんで元気。八広は勢い余ってクリック音を飛ばすくらいノリである。極秘特訓した甲斐はあった。ルフロンも余裕たっぷり。蒼葉にウィンドベルをいじってもらったり、文花にはカウベルを叩かせたり、メンバー総出のセッションを仕立てるのに一役買う。

難度の高い曲ながら、一曲とも一応の音合わせはできた。閉場時間まで残り少々。詰め切れない部分を話し合う面々である。三曲目はグランドピアノ系のおまけを足し、間奏にはサックス、歌は千歳に頑張ってもらおう、ということ仮決定。四曲目は、千歳はギター専門というのはすんなり決まるも、ボーカルをどうするか、で引っかかる。本来なら櫻で行くところ、鍵盤は欲しい、されど歌いながらはちと困難、ということ難航しているのである。だが、曲調が些か艶かしいこともあって、「この女性にお願いすることにした。」

「そつねえ、『キャットウォーク』に似た感じあるし、歌えるかも」

「んじゃ、蒼葉さん想定で詞、書きます!」

八広は毎度の如くデレっとながらも威勢がいい。舞恵は珍しくノーリアクション。「ま、えーわ」だそう。洒落で済ませられるくらい、今の彼女にはゆとりがあるということである。

最年長の女性が一言。「それにしても皆、達者ねえ。特に楽曲データよね。あそこまでのつこの間に仕込んだんだか」

「昔、作っておいたのを複製したようなもんなんだ。一からだったら、とてもとても」

「隅田さん作も?」

「業平君ほど持ち合わせはないですが、やっぱりストックしてあるのを加工して、再生した次第です」

「再生か。そうよ、再生。いいじゃない。無題の曲は一つそれをテーマにしたら?」

聴衆の声は貴重である。ニーズに応じてこそ、詞も生きるといふもの。八広は舞恵に早速尋ねてみる。

「reviveって再生?」

「そりゃ、蘇生だワ。自然再生ってことなら、renaturationなんじゃ?」

楽器や機材を片付けるメンバーを横目に、モデルさんがガタガタと動き出す。こっちはこ

つちで大荷物である。

「蒼葉さん、そのスーツケース。これからどちらへ？」

事情を知らない業平が引き止めるように訊ねる。

「あ、半蔵門線で押上まで出て、そこから京成線で……」

ルートを訊いている訳ではなかったのだが、いきなりパリとは言えないから説明が長くなる。

「えっ、エールフランス？ 今から？」

「フライトは十時前なんだけど、クリスマス時期ですからね。早めに出ます。皆さん、よい年末年始を。櫻姉は留守番よろしくネ。Salut!」

「はいはい。Bon voyage!」

「やっぱりモデルさんは違うわ」 八広がまたトボけたことを言うので、今度はかりはルフロンも黙っちゃいない。

「ったく。明日、覚えてらっしゃい！」 手持ちのマラカスで彼氏の腰の辺りをひっぱたく。これぞくりくりルフロンのギックリ攻撃である。思いがけず強力な一撃だったので、八クン、ビックリ!となる。

弥生と文花が同じ場に居る手前、業平としては下手に明日の話はできない。「ここへ来てモテモテなのはいいが、トライアングルの当事者になってしまった、というのはいただけじゃない。そんなことなど知る由もない年長さんと年少さんは今は仲良く談笑中。

「そっか、おふみさん、明晩はちゃんと予定入ってるんだ」

「そっという弥生嬢は？」

「明日になったら……ま、成り行き次第じゃないでしょうか」

傍らで聞き耳を立てていた業平は、自分の名前が出なくてひとまずホッとしていたが、成り行き云々というのを聞いて、目を白黒させている。こっぴどした駆け引きはノリでは対処できない。どうする？ どうなる？